

# 東西文化の調査報告書

(抜粋)

平成 28 年 3 月  
岐阜県関ヶ原町

# 目 次

調査概要	
調査の背景と目的	1
第1章 関ヶ原町を境とした東西文化の調査	
1.1 調査にあたって	3
1.2 食	4
1.3 ことば	13
1.4 文化	17
1.5 その他（中山道3宿の特徴）	24
1.6 関ヶ原町を境とした東西文化の調査のまとめ	27

## 調査概要（序章）

### 調査の背景と目的

#### <背景>

関ヶ原という地名は、日本の歴史教科書で必ず目にするといいほどの抜群の知名度がある。これは合戦の地として歴史の表舞台に度々登場したことが大きい。

それでは、なぜ関ヶ原が合戦の場として、それも日本の行く末を左右するような大きな決戦の場として選ばれたのであろうか。一度だけなら偶然と片づけることもできようが、「壬申の乱（672年）」や「関ヶ原の戦い（1600年）」など、まさに天下を分ける戦いが二度もこの地で起こるとなるとやはりそこには何らかの必然性があったと考えた方が自然である。この必然性を考えるにあたって、関ヶ原の置かれた地理的、歴史的な背景を押さえておく。

まず地理的に見てみると、関ヶ原は日本のほぼ中央に位置し、かつ交通の要衝であったということである。具体的には、①「奈良」・「京都」と「東京」という東西（新旧）2つの都の間に位置している、②山地と山地に挟まれた鞍部（峠）にあたり交通路が集中しやすい、③交通が集中するため戦略上重要な拠点になりやすい、④古代の中心であった畿内とそれ以外に区分した場合、畿内の勢力範囲が及ぶ最外縁部に位置するなどが挙げられる。これらが該当する場所は日本でも数か所に限られ、関ヶ原（不破関：東山道）と鈴鹿（鈴鹿関：東海道）、そして敦賀（愛発関：北陸道）という古代に置かれた三関の地と一致する。恐らくはこれらの地が、当時の為政者にも重要な戦略上の拠点として認識されていた証になるのではないだろうか。

さらに地形的に見てみると、敦賀の愛発越・七里半越の途中にある山中峠は標高 383m で、別名「七里半越」の名のとおりおよそ 30km の長い距離の難所であったこと、鈴鹿の鈴鹿峠は標高 357m で片方（三重県側）は高低差が急激になっている難所であったと言われているのに対し、関ヶ原の今須峠は標高 175m で、かつ峠の両方とも比較的なだらかで人荷の往来がしやすかったと考えられる。現代においても、建設当時の工事技術に影響するところがあったにせよ、わが国の大動脈である東海道新幹線や名神高速道路が距離的に最短コースである鈴鹿を通らずに関ヶ原ルートを選択していることは、一番通過しやすいことの裏付けになるのではないかとと思われる。

また、東西区分の要因の一つとして伊吹山の存在も欠かすことはできない。古来より伊吹山は神のいる山（霊峰）と崇められていた。気候も日本海側気候と太平洋側気候とに分かれる地域で、特に冬季は西側（畿内側）から見ると、山容は白く輝いて遠くからでも目立つ神々しい山に見えたと思われる。伊吹山は畿内の最果てになる境界の象徴として、その山の向こうは「別の世界＝異界」という心理が働き、畿内文化の伝承も伊吹山麓の峠を越えることは少なかったのではないだろうか。

次に歴史的背景を見てみると、天智天皇の弟（大海人皇子）と子（大友皇子）との間で皇位継承問題がおこった日本の古代史上最大の内乱「壬申の乱」（672年）において、関ヶ原の東側は大海人皇子の私的領地（湯沐邑）であったことからいち早く味方につけ、東側から「不破

道」を固め東国から近江朝（大友皇子）側への人的・物的補給路を遮断した。これが奏功し大海人皇子側勝利の決め手になったと言われている。それではなぜこの地が皇子の私的領地となっていたのであろうか。一つの有力な説としてこの地域では「鉄」の生産・管理が行われていたということがある。大垣赤坂の金生山から鉄鉱石が産出されており、為政者にとって兵力の確保もさることながら、鉄の安定的確保ができる面でも押さえておきたかった。加えて、外の国「東国」を抑える戦略上においても重要な拠点であったことが推定される。

また、豊臣秀吉亡きあとの政権内対立に端を発し、徳川家康の天下を決定づけた「関ヶ原の戦い」（1600年）では、まさに軍事上の重要拠点をどちらが抑えるかでこの地が戦場になったことから、関ヶ原というと合戦の地としてのイメージが強く印象づけられている。

地理的な要因や地形的に狭隘地であることから関が設置しやすかった点もあるが、歴史的にも戦略上の拠点であったことから、後に「不破関」や不破関廃関後も長きにわたって関所的機能を有し、人荷の往来を監視していたと言われている。

関ヶ原の魅力は、軍事的な拠点としてのみにとどまらない。古来より東山道など街道が通過していたことから東の文化と西の文化が接することも多く、東西文化の混在・融合がなされている稀有な地域でもある。古来、関ヶ原の地は和甕（わざみ）と呼ばれていた。「戦の場から和甕（わざみ）へ」。和甕とは甕（しばらく）して和する所とも読める。地理的な境界や交通の要衝であるが故に、各地から兵士が集まり「戦の場」となったという過去から、各地から人々が集う「和の場」となる未来に向けてこの地が発展することを目指している。

#### <目的>

本調査は、この地域で传承されている様々な文化、中でも東西文化の境界地域としての特徴にスポットを当て、文化観光の魅力を再発掘し、活用方策の検討を図る上での基礎データにすることを目的とする。

## 第1章 関ヶ原町を境とした東西文化の調査

### 1.1 調査にあたって

- ・ 既存文献の調査、ヒアリングとアンケート調査を実施。ヒアリング調査は関ヶ原町内の地区に偏りがないよう対象者を選び、町内にとどまらずに周辺自治体（垂井町、大垣市、米原市）にも拡大した。
- ・ 自治体に設置されている歴史民俗資料館等の関係者、元教育者などの専門家から、地元地域の豊富な情報を持っている自治会長や宗教関係者、他地域から嫁がれた主婦までヒアリング対象者の幅を広げた。
- ・ アンケート調査については、関ヶ原町と米原市の一部の中学生、壮年世代、高齢者世代と世代を分けて実施した。
- ・ ヒアリングやアンケート調査を踏まえ既存文献の裏付け（強化）、あるいは相違点を明らかにし生の情報に置き換えた。
- ・ 既存の文献等を調査するにあたっては、関ヶ原古戦場グランドデザイン・フォローアップ懇談会「大地の物語」検討分科会のアドバイスのもと、食、ことば、文化、その他のカテゴリー別に分類して整理した。
- ・ 米原市「まいばら協働事業提案制度」採択事業「東西(とざい)東西プロジェクト」と共同でアンケート調査を実施し、「食」「ことば」の使用方法の分布を調査した。
- ・ カテゴリーごとに文献、ヒアリング、アンケート結果と地域ごとの傾向を図表化した。
- ・ 項目ごとで関ヶ原付近に境界線があるかどうかを記号（○、△、×）で示した。

#### 【関ヶ原町略図】



## 1.2.食

- ・ 食は地域差が見えやすい一方、各家庭、世代によっても違いがあり、「個人≠地域の特色」であることに注意する。婚姻圏はどの地域も昭和初期頃まではあまり広くはなかったが、今須地区は滋賀県が隣接していることから、滋賀県民との婚姻が見受けられた。原則的に「家の味」を継ぐことにはなるが、料理をする者（多くは嫁）の育った環境の影響を受け、家の中で混在することもある。
- ・ 近年、マスコミ媒体などにより共通の情報があふれ、また個々人のライフスタイル変化が著しい。例えば冠婚葬祭における「葬の食（お斎）」も簡略化、共通化が見られ地域間の差異が急速に無くなりつつある。味噌は「手前味噌」という言葉があるように、本来は「各家庭の味」であったが、スーパー等での購入が主流になり流通されている商品メニューの中から選ぶことが多くなった。

アンケート結果によると、合わせ味噌と回答した割合が多くなっている。それでも岐阜県側の関ヶ原中（44.7%）、今須中（33.3%）は赤味噌と回答した割合が高い傾向が見て取れた。対して滋賀県側で赤味噌と回答した割合は、それぞれ柏原中（4.2%）、伊吹山中（3.7%）、河南中に至っては0%であった。

- ・ 今須峠を境にした文化の差異が依然として見られる一方、業者の流通経路により機械的に県境での区分がされる事象も見受けられることから、今須地区の“東”化が進行しているとも言える。一例として、従来は丸餅文化圏であった今須地区も、角餅と丸餅の共存が見られている。
- ・ 全般的に本町内は、近時に至るまで行商人が来ていたことから、滋賀県（江州）の食文化の影響が色濃く出ている。

### (1) 出汁の違いについて

#### A. 昆布出汁が「西」の理由

- ①古くは交易物、献上品として都がある関西に集まってきた素地があった。
- ②主な産地である北海道からは日本海沿岸を通り関門海峡を抜け大阪・堺までの西回り航路によるルート（コンブロード）があった。
- ③関西の水は「軟水」が多いため、昆布出汁が抽出しやすかった。  
風味を引き立たせるため味付けは「薄口醤油」でよかった。

#### B. 鰹出汁が「東」の理由

- ①鰹節の製法が広まり長期保存が可能になった。
- ②鰹節の生産拠点の一つに焼津があった。
- ③関東の水は「やや硬水」であり、昆布のうまみが抽出されにくい。そのため鰹などの魚から出汁を取ることが多かった。  
味付けは魚の風味を和らげるため、「濃口醤油」が使用されることが多い。



東（鰹出汁）

西（昆布出汁）

出所：tetsuda ブログ「どっぶり！奈良漬」、日清食品「どん兵衛」つゆ比較

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

### (2) 青ネギと白ネギについて

#### A. 青ネギが西日本に好まれる理由

- ①葉ネギともよばれ発祥の一つは京都の九条ネギであった。葉ネギは先端部まで食べることができる柔らかいもの。
- ②耐暑性があり暑い地域（西日本）でも傷みにくかった。
- ③風味（香り）がよく、炒めものや薬味として活躍（香り重視）
- ④ビタミン・ミネラルが豊富で栄養価が高い。
- ⑤青くて彩りが良い。

#### B. 白ネギが東日本で好まれる理由

- ①加熱するとやわらかくなって甘味が出る（味わい重視）。
- ②温かい鍋物や煮込み料理に合う（寒い地域で好まれる）。
- ③日光に当てずに深いところまで土寄せをして栽培することで、太くて白い部分を多くする。



出所：「野菜情報サイト」ホームページ

アンケート結果によると、白ネギと青ネギについては、「どちらも使う」割合が一番高かったが、「すき焼きに入れるネギ」の場合、一番東よりの関ヶ原中で青ネギを入れる割合は 5.3%に対し、一番西よりの河南中の割合は 30.3%になっており、西に行くにしたがって青ネギ使用が高くなっている。

### 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

#### (3) カレーに入れる肉の種類について

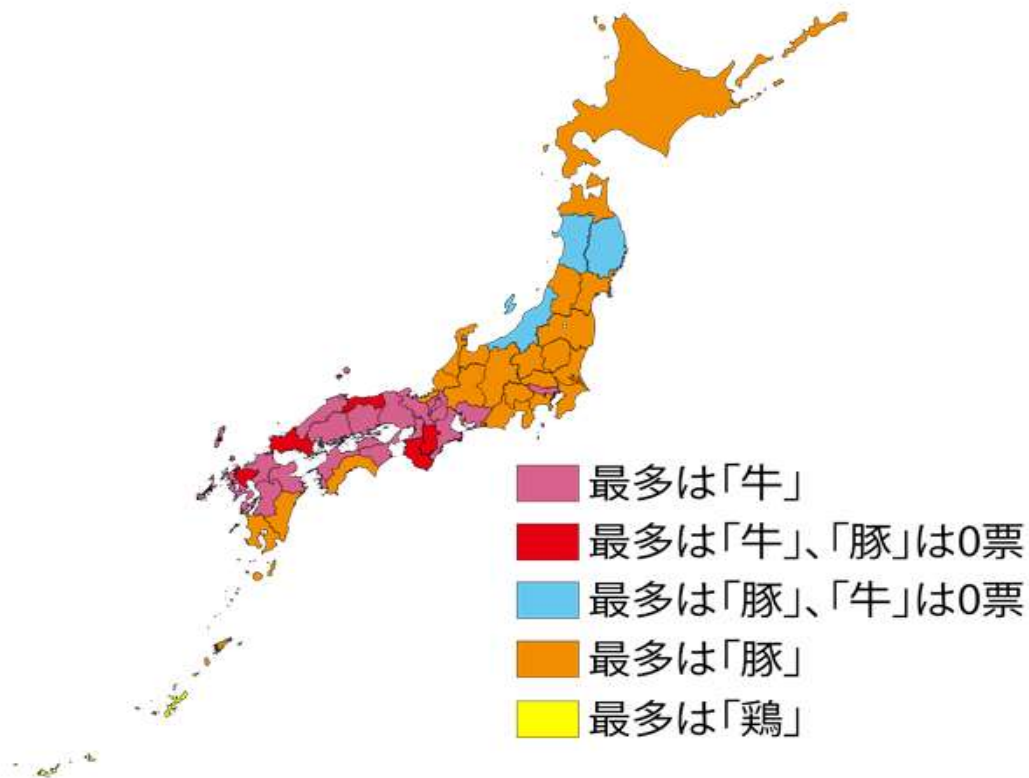
##### A. 牛肉が「西」に多い理由

- ①ブランド牛の産地が近くに多く、品ぞろえや価格面で入手しやすかった。
- ②牛肉屋、ステーキ屋も大阪が発祥。食には目がなく、大阪人は新しいものの好きの気質。カツと言えは「ビフカツ」
- ③農耕用家畜として西は「牛」が、東は「馬」が多かった。西ではお役御免となった牛がそのまま肉として使用された。

##### B. 豚肉が「東」に多い理由

- ①寒さが厳しい東日本は比較的脂肪分の多い「豚」が好まれた。
- ②関東近郊では養豚業が盛んになった。
- ③洋食文化が普及し牛肉よりも豚肉が使われた。カツと言えは「トンカツ」。





出所：「J」タウン研究所」ホームページ

アンケート結果によると、関ヶ原中、今須中は5割強が豚肉で、逆に柏原中、伊吹山中、河南中では牛肉が6割前後になるなど滋賀県と岐阜県の境で綺麗に分かれている。

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

### (4) 川魚の違いについて

#### A. 近江地方

- ①琵琶湖に生息する鮎の中には産卵直前まで湖内で過ごすものがいて、それは体長10センチメートルにしかならないため「コアユ」と呼ばれている。そのため鮎と言えばコアユがイメージされる。
- ②琵琶湖産のスジエビと大豆を甘辛く炊いた「えび豆」が湖北地方の郷土料理。行商人が関ヶ原にも売りに来ており馴染みのある食品。
- ③甘露煮と言えば「コアユ」。なお、琵琶湖の鮎（成魚）は放流用として近隣県に出荷されており、岐阜県内にも琵琶湖の鮎を運んでいる。

#### B. 美濃地方

- ①清流長良川のイメージなどから「鮎」と言えば成魚（子持ち鮎）が好まれる。

- ②美濃（西濃）地方南部（海津等）では「鮎味噌」が郷土料理にある。ただし、天然もの川魚（鯉、鮎など）は川の汚染等で少なくなり養殖が多い。関ヶ原でも「鮎味噌」を昭和40年代ごろまで家で作っていたが、現在はほとんどなくなったようである。
- ③甘露煮にする小魚は「タモロコ」「コウライモロコ」などモロコが多い（ホンモロコは琵琶湖に生息する貴重な魚のため甘露煮にはあまり利用されない）。

アンケート結果によると、小魚の甘露煮と言えば圧倒的に「小鮎」がイメージされ、関ヶ原中でも76.3%に達していた。行商人の影響で、関ヶ原町でも馴染みとなっていることが裏付けられた。また、鮎味噌を食べる習慣は、アンケート実施地域では満遍なく2割程度いることが判明した。

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

### (5) 丸餅と角餅について

#### A. 丸餅が西日本に広まる理由

- ①京都の食文化の影響を強く受けた地域は主に丸餅が使われた。
- ②白くて丸いので、「三種の神器」の銅鏡の形に似ているから鏡餅と言われるようになった。鏡餅の分身である小餅を入れた雑煮を食べた。正月の小餅を年魂（玉）として家族全員に配ったのがお年玉のルーツ。神が宿る特別な存在として敬われ、餅を食べると力がつき、新しく生命を再生させる霊力があると信じられ、ハレの日に餅を食べる習慣が広がった。
- ③お供え用は丸餅、食用は角餅と使い分けているところもある。

#### B. 角餅が東日本に広まる理由

- ①餅をついて一つ一つ手で丸める丸餅を用いると江戸では人口が多かったため、このやり方では時間がかかった。そこで、手早く大量に作れるように餅を一気に伸ばしてから切り分ける角餅文化が広まった。



出所：「日本鏡餅組合」ホームページ、「全国餅工業協同組合」ホームページ

アンケート結果によると、関ヶ原中、今須中とも角餅が7割を超えていた。今須地区は角餅文化圏になっていると考えられる。対して、西から河南中、伊吹山中は丸餅が7割を超え、丸餅文化圏であるが、もっとも岐阜県よりの柏原中は角餅と回答した割合が37.5%あり、丸餅47.9%との差が少なくなっている。現在の角餅・丸餅文化圏の境界域は、滋賀県柏原地区になっていると推測される。

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

(6) おにぎり（おむすび）の形状について

A. 俵型が関西で広まった理由

- ①大坂（大阪）では町人文化が栄え観劇が娯楽であった。劇を見ながら（幕間に）幕の内弁当を食べるのが流行った。幕の内弁当の中に入れるため一口サイズの俵型のご飯で、箸で取りやすい形であった。
- ②現代は流通業者の全国均一化商品で「おにぎり」と言えば三角型が主流になっている。

## B. 三角型が関東で広まった理由

- ①原型は屯食（元服の儀に下級役人へ賜る食べ物）で、屯は「握る」「押さえる」の意。  
また、戦国時代、干し飯（ほしいい）とならび兵糧食として活用された。明確な呼び名は記録されていないが「握り飯」と呼ばれていた可能性が高い。
- ②武士が持ち歩くために、強く握れる三角形のおにぎりが浸透した。
- ③江戸のおにぎりは握りやすいように丸型か三角型で直径がおよそ5センチメートルの小さなものであった。

出所：日本経済新聞、㈱なにわ食品「大阪の食文化」ホームページ



出所：「日本人のファーストフードだ！おにぎりニッポン」ホームページ

アンケート結果によると、圧倒的に「三角型」と回答した割合が高く、「俵型」が関西圏でも減少しており、全国で共通化してきたものと推測できる。

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ×

### (7) いなりずしの形状の違いについて

#### A. 三角型が関西で広まった理由

- ①関西風は京都伏見稲荷が発祥で、油揚げを対角線上に切って三角型にしたのは伏見稲荷の稲荷山の形を模したものやきつねの耳をイメージしたものと言われているが、元来は俵型だったと考えられ、三角型にしたのは後世になってからと推察される（他のいなりずしとの差別化を図った）。

②具に人参や牛蒡、椎茸などの具材を入れるスタイルになった（酢飯のみは少ない）。

B. 俵型が関東で広まった理由

①山城国風土記によると、イナリとは、イネナリ・イネニナルのつづまったもので、イネナリ（稲生り）が転じて「イナリ」となり「稲荷」という当て字が使われた。稲という字から、後に稲の神（食物神）が習合したため豊穰を感謝して奉納する米俵を模して俵型に包むものが伝わった。

②奉納する米俵をイメージし、具を入れなくて白い酢飯を入れるスタイルを守っている。

出所：「伏見稲荷大社」ホームページ

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

(8) 「ぜんざい」と「お汁粉」（注：「粒あん」で「汁気あり」）の呼び方

A. 関西では「ぜんざい」という理由

①有力なルーツは、出雲地方の「神在（じんざい）餅」から、ぜんざいに訛って京都に伝わった。

②一休宗純を名付け親とする説は、美味しさに感動し「善哉（よきかな）」とつぶやいたことから。

③「こしあん」のものを「お汁粉」として区別した。

④なお、汁気のない「つぶあん」のものを亀山・小倉という。

⑤境界域は富山・新潟、岐阜・長野、愛知・静岡の各県境付近。

B. 関東では「お汁粉」という理由（呼び名が変わったパターン）

①室町時代の後半ごろに関東にも「ぜんざい」が伝わった。

②汁気があるものは「つぶあん」「こしあん」にかかわらず「お汁粉」と名付けられた。

③「つぶあん」を「田舎汁粉」、「こしあん」を「御膳汁粉」と区別する場合もある。

④旧来の「ぜんざい」という名は、汁気なしのものを指すように変化した。

出所：日本経済新聞

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ×

(9) 鰻のさばき方について

A. 関西では「腹開き」になる理由

①料理人の腕が高かったからとも言われている。鰻を柔らかく焼き上げる技術や、肋骨がない鰻には相当な腕がないと上手くさばけなかった。

②鱧（ハモ）料理も京都・大阪では馴染みがあったから。鱧には「骨切り」という高度な下処理が必要となるが、これは腹側から割く。そのため鰻も腹側から割くことが当然のようになった。

③境界域は、浜名湖の西から天竜川沿いより東が背開きに。

B. 関東では「背開き」になる理由

- ①江戸の町には単身男性が多かったと言われ、熟練した料理人が不足していた。
- ②「気が短い」江戸っ子に提供するため、料理時間を短くする努力がされていた。あらかじめ白焼きにして箱に入れて蒸らしておき、お客が来たら余熱で柔らかくなった鰻を焼いていたと言う。
- ③蒸す工程があるため、腹から割いた場合、外側の身が薄くなり崩れやすく串から外れてしまう。
- ④仰向けにしないため鰻が大人しくなり割きやすい。また成長した鰻は背ビレが硬いが、背開きであると取り除きやすい。

出所：「日本料理人の創作料理研究所CCL」HP

アンケート結果によると、関西風（蒸さずに焼く）が多く、関東風（一度蒸す）と答えたのは各地域とも1割前後であった。

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ×

(10) 「ところてん」について

A. 関西ではデザートになる理由

- ①黒蜜をかけて、果物と共に甘いデザートとして食べる。
- ②吉野の葛きりに親しんでいる関西では、葛きりと類似していることから黒蜜をかけるイメージ（おかずからデザートへ）とつながった。

B. 関東ではおかずになる理由

- ①本来は酢醤油や三杯酢をかけて海苔、辛子で味付けしておかずとして食べていたと考えられる。
- ②天草（てんぐさ）と言う海草から出来ているため磯臭く、酢醤油など酸味で臭みを和らげていた。

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

### <食：東西比較一覧表>

	事象	東西の違い		関ヶ原付近が境界線	理由
		東	西		
1	出汁の違い	鰹出汁ベース	昆布出汁ベース	○	昆布は交易物として都に集積。硬水・軟水の違い
2	青ネギと白ネギ	白	青	○	青は耐暑性があり。白は寒冷地の鍋物に適す
3	カレーに入れる肉の種類	豚	牛	○	西は牛の産地が近く身近。東は脂肪分の高い豚が好まれる
4	川魚の違い	美濃：モロコ	近江：コアユ	○	琵琶湖のコアユが移動できる地域か否か
5	丸餅と角餅	角餅	丸餅	○	東（江戸）は大量生産、京は三種の神器「鏡」の形
6	おにぎり（おむすび）の形状	三角型	俵型	×	東は武士が握りやすい形、西は幕の内弁当に入れやすい形
7	いなりずしの形状の違い	俵型	三角型	○	三角は京都伏見稲荷オリジナルで西で広まった
8	ぜんざいとお汁粉の呼び方	お汁粉	ぜんざい	×	出雲の「神在（じんざい）餅」から訛って京では「ぜんざい」に
9	鰻のさばき方	背開き	腹開き	×	江戸は単身の若い職人で技術が低く、さばきやすい背開き
10	「ところてん」の食べ方	おかず	デザート	○	吉野葛に馴染みのある西は同様の食べ方に

### 1.3 ことば

- ・ 全般的に本町内は美濃弁が優勢ではあるが、近江弁の混在が見られる。今須峠を境にして、今須地区は近江弁が優勢である。ただし地域を細かく見てみると、同じ県境であっても今須地区は色濃く出ているのに対し、玉地区はやや薄い傾向がある。
- ・ 美濃弁を強調する意味で「美濃のじゃ言葉」と表現されることもある。ただし現在では「断定の助動詞」は美濃弁内においても（～や）を使うことが一般的である。
- ・ 滋賀県に隣接する関ヶ原町、大垣市上石津町、揖斐川町などの西濃地方の一部は、アクセントが東京式と京阪式の間形態（垂井式アクセント、京阪式の変種）が見られる。

#### (1) アクセントの違いについて（例：マクドナルド）

##### A. マクドナルドの略語「マクド」が「西」に広まった理由

- ①京阪式アクセントには、「テレビ」のように三拍語（の省略語）は「低高低」に発音する傾向がある。「マック」であると二拍目に高く発音できないため浸透しなかった。
- ②「ミスド」は二拍目が発音できるので全国共通の省略語になれた。

##### B. マクドナルドの略語「マック」が「東」をはじめ全国で広まった理由

- ①東京式アクセントは高低アクセントとも言え、一拍目が高い傾向にある。そのため二拍目が促音であっても影響はない。
- ②マクドナルドは、自社の省略語として「マック」を使用している。（例：マックデリバリー）

出所：真田信治「関西・ことばの動態」大阪大学出版会

アンケート結果によると、マクドナルドを「マクド」と省略する割合は、岐阜県側の関ヶ原中、今須中の割合が2割強に対し、滋賀県側の柏原中、伊吹山中、河南中は5割を超えており、この付近に境界線があることが推測される。

### 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

#### (2) 方言の違いについて

方言では、学者によって岐阜・愛知を「ギア方言」と称し、西日本方言に含む場合と含まない場合に分かれている。逆に言えば、岐阜・愛知は両方の方言に混在が見られる地域である。

西日本方言の特徴：母音はあまり変化しない。子音が脱落する傾向がある。

東日本方言の特徴：母音が脱落する傾向がある。子音が連続したり、融合して別な母音になったりする傾向がある。

断定の助動詞は「～である」が変化し、「る」が脱落し「であ」になったもの。

例：「雨である」が「雨や」に

A. 断定の助動詞「～じゃ・～や」が「西」で広まった理由

- ①「であ (dea)」→ (母音は残したまま d 子音が口蓋化 (※1)) → 「じゃ dzea(=ja)」  
→ (子音脱落)「や (ya)」

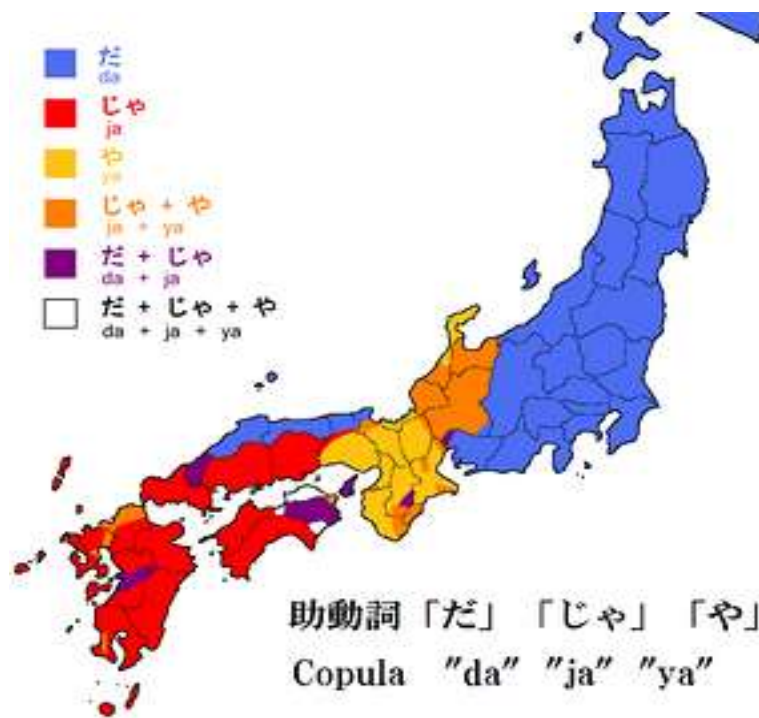
(※1) 口蓋化：子音が調音点で調音されると同時に、前舌面が硬口蓋に向かって盛り上がって近づく現象のこと

- ②「や」は江戸時代末期に大阪で女性言葉として発生した。「や」という語の持つ柔らかい響きが女性的であるということが関係している。「や」はしだいに近畿地方の多くの地域に広がり、老若男女誰もが使うようになった。

例：「雨である」が「雨だ」に

B. 断定の助動詞「～だ」が「東」で広まった理由

- ①「であ (dea)」→片方の母音が脱落→「だ (da)」
- ②「だ」は共通語形として認識



出所：「方言学」(藤原与一著、三省堂、昭和 37 年)、「日本国語大辞典」

※ワ行五段動詞の連用形がウ音便になる (例：買った→買うた、言った→ゆうた)。

※形容詞の連用形がウ音便になる (例：高くない→たこーない・たかーない)。

**関ヶ原付近が境界線と考えられる ○**



### (3) アホ・バカの違いについて

#### 柳田國男「方言圏論 (※2)」の検証例

(※2) ある言語現象が中央から周辺地域に広まっていく過程は波紋のそれに類似していると考え、波紋の周辺にあたる方言圏のあちこちにかつて中央で使われた共通の古い形がみられると説く論

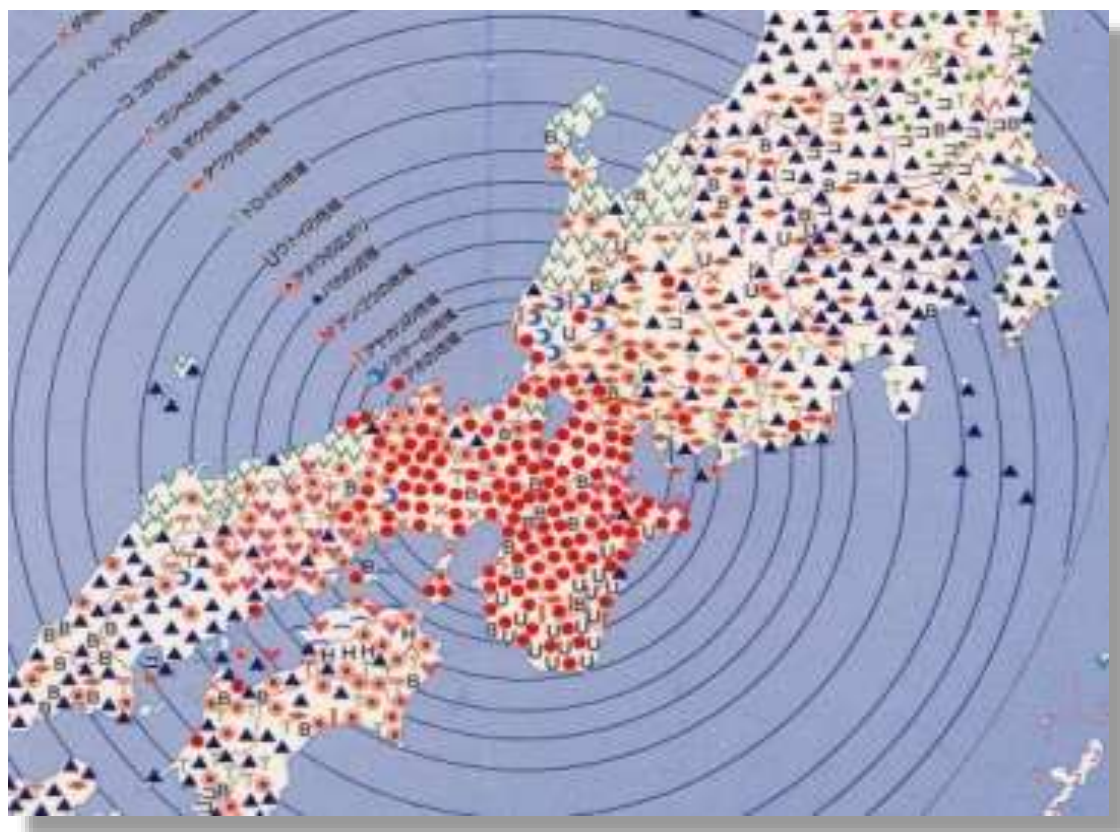
#### A. 「アホ」が「関西」に広まった理由

- ①「バカ」という言葉は京都で使われており、共通語として広まっていった。
- ②それからおよそ1世紀後になると、中国江南地方での方言「阿呆 (アータイ)」を禅僧が伝え (日明貿易)、日本語読みの「あほう」→「あほう」→「あほ」になったという (輸入言葉)。
- ③この輸入言葉は関西でしか広まらなかった。

#### B. バカが「関東」等に広まった理由

- ①当時の文化の中心であった京都から順に伝わってきた。
- ②波紋のもう一方である西の境界線 (中国・四国地方) にも「バカ」が伝わっていた。

出所：松本修「全国アホバカ分布考 はるかなる言葉の旅路」太田出版



※● (赤丸) : アホ、▲ (青三角) : バカ、◆ (オレンジひし形) : タワケ

出所：松本修「全国アホ・バカ分布考 はるかなる言葉の旅路」太田出版より「全国アホ・バカ分布図」

なお、愛知県・岐阜県を中心とした東海地方には「タワケ」領域が存在する。

タワケとは、「田」を分割して相続させる愚かな行為という意味から伝わった。従来「田」を守って行くためには大家族制でたくさんの人手を必要とするのに、分家をして「田」まで分けてしまったのでは、本家も分家も共に田を維持出来なくなる間違った愚かな選択をしたという説が有力である。

アンケート結果によると、アンケート実施地域では「アホ」を使う割合が各地域とも9割を超えていて、関ヶ原町内でも「アホ」が幅広く浸透していた。

また、「タワケ」の使う割合については、アンケート実施地域のもっとも東に位置する関ヶ原中では56.9%、もっとも西に位置する河南中では12.1%と、西に移動するにつれて、「タワケ」を段階的に使う割合が減っていることがわかった。

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる △

その他方言

原因・理由を表す接続助詞「～さかいに」。

大阪・京都では使用頻度が少なくなったが、滋賀県では依然勢力を保っていると言われている。方言圏論の波紋の一例になる可能性がある。

補助動詞「～みえる」という尊敬語。

東海地方でよく使われる方言であるが、滋賀県米原市でも使われる。

感謝の意味で使う「おおきに」。

岐阜県西部（西濃地方）では方言として使用している。

### <ことば：東西比較一覧表>

	事象	東西の違い		関ヶ原付近が境界線	理由
		東	西		
1	アクセントの違い（マクナルドの略語）	マツク	マクド	○	西は二拍目が高く、発音できない省略語は浸透しない
2	方言の違い（断定の助動詞「～である」）	～だ	～や・～じゃ	○	西日本方言は母音があまり変化せず子音が脱落する傾向
3	アホ・バカの違い	バカ	アホ	△	方言圏論の証明。新しい言い方「アホ」が中心で広まる

## 1.4 文化

- ・ 滋賀県（江州）の影響を大きく受けている。例えば、本町内（一部、隣接の垂井町も含む）は、盆踊りの際に「江州音頭」から覚える。地域内には「音頭取り」がいた。昭和27年には「関ヶ原音頭」も作られている。なお、大垣市は「大垣音頭」や「郡上踊り」を覚えることが多い。
- ・ 太鼓踊りの分布は全国的に見られる。当地域では滋賀県から岐阜県西濃地域（伊吹山地の尾根伝い）にかけて良く似た太鼓踊りが分布している。
- ・ 本町は扇状地であることから水不足に悩むことが多く、雨乞い踊り、豊年祭りとも重なることもある。
- ・ 近畿地方を中心とした地藏盆の風習も残る。
- ・ 滋賀県（江州）湖東・湖北地域の大きな特徴として建物の「ベンガラ塗」がある。今須地区は人的つながりから県を超えて滋賀県（江州）の大工に建築を依頼することもあり、ベンガラ塗の建物が散見される。
- ・ 地域でお墓掃除を行うなど冠婚葬祭の「祭祀」が残っている。垂井町以東は都市化の影響もあるのかそういう行事が少なくなっている。一方、紅白のぼんぼりを飾る風習は美濃地方の一部に残るが江州にはない。

### (1) 大学〇年生の呼び方の違いについて

#### A. 「大学〇回生」が「西」に広まった理由

- ① 京都大学は学年と科目を結び付けず、一定の単位を取れば卒業できる制度を採用した（東京大学との違いを意識した）。
- ② ドイツ留学を経験した教員が多く、自由な学風を取り入れたため、進路に関して学生に一定の裁量を与えていた。
- ③ 京都市内には大学が密集していて、かつ教員や学生の交流が盛んであったため、文化や慣習が共有されていた。

#### B. 「大学〇年生」が「東」で広まった理由

- ① 東京大学は学年ごとに履修する科目を決め、試験に合格しなければ進級しない制度だった（官僚養成機関として）。
- ② 官僚にとって「〇年生」は馴染みがあり、大学以外にも日本の教育で使用された。

出所：日本経済新聞

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

### (2) 農耕牛・農耕馬について

#### A. 農耕牛が「西」に広まった理由

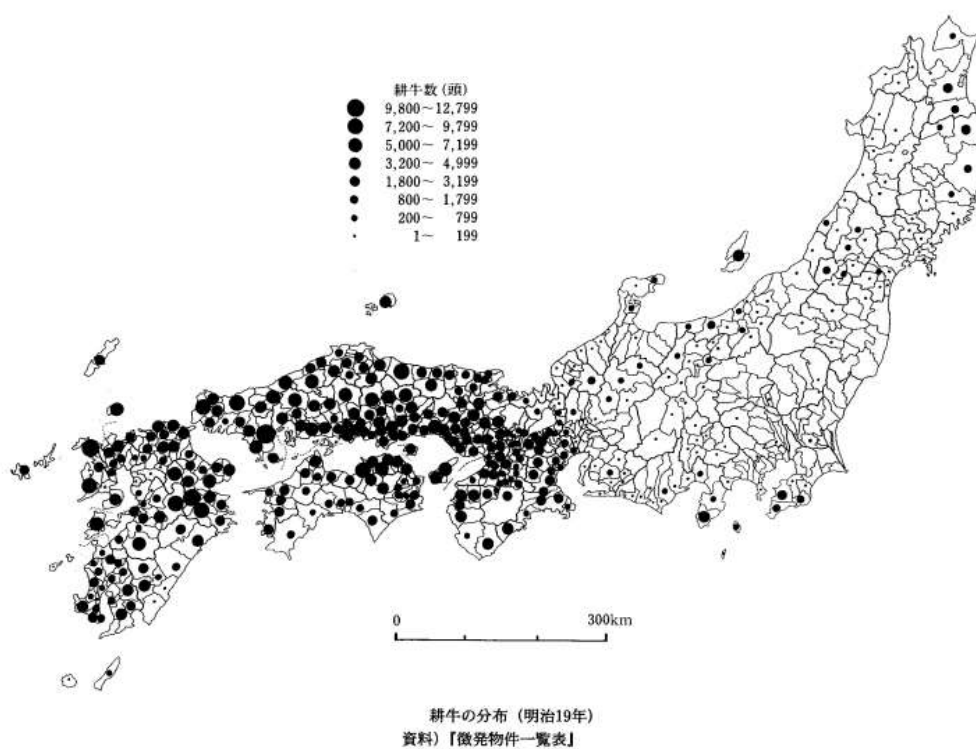
- ① 産地の位置とその流通範囲による。西日本各地に供給していた産地は主に中国地方の牛産地からであり、供給範囲は滋賀県、三重県あたりまでに限られていた。

牛が身近な存在であることから、食肉としてまず牛肉が好まれることが多いのは、因果関係があるかもしれない。

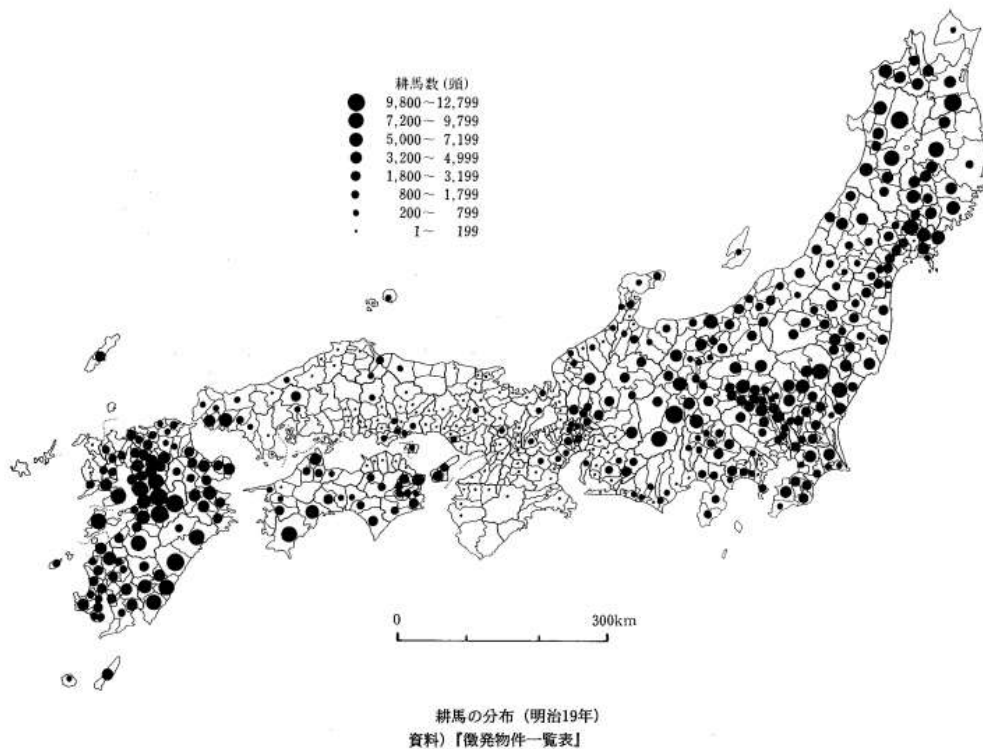
#### B. 農耕馬が「東」に広まった理由

- ①産地の位置とその流通範囲による。東日本に供給していた産地は主に東北地方の馬産地からであり、供給範囲は関東地方および新潟県あたりまでに限られていた。また、中部地方にも小規模な産地(木曾馬)があったが供給力が小さかった。そのため中部地方は、全国的に見ても最も耕牛・耕馬とも少ない地域であった。

#### <農耕牛の分布>



## < 農耕馬の分布 >



出所：中西遼太郎「明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について」歴史地理学

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

### (3) 竈(かまど)・囲炉裏文化について

#### A. 竈文化が「西」に広まった理由

①温暖な西日本では夏季の囲炉裏の使用を嫌い、竈との使い分けが古くから行なわれている。

#### B. 囲炉裏文化が「東」に残った理由

①東日本では竈が一度は普及しながらも囲炉裏が再び浸透し、竈の使用は廃れてしまったところが多かった。緯度が高いため冬が長く、夜が長い東日本、北日本では、暖房用、照明用として家の中央の囲炉裏で常時火が焚かれている。

②竈を別に設けて調理に使うよりも、炉の火で炊事を行ったほうが燃料の浪費が抑えられ効率が良かった。

出所：野本寛一編「食の民俗事典」終風舎

## 関ヶ原付近が境界線と考えられる ×

#### (4) 建築様式

##### A. 入母屋造が「西」に広まった理由

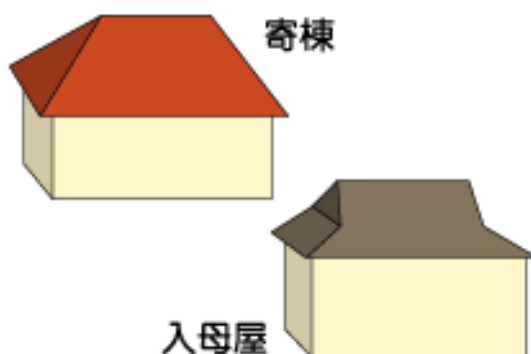
- ①入母屋造りは、もともと格式の高い建築様式として重んじられた。京都御所をはじめ著名な神社仏閣や各地の城郭建築にも随所に見られる。
- ②実際の建築物が近くに見られる畿内では、一般建築にも応用されることが多かった。
- ③機能的に見ると、破風(※3)を持っているため通気性が良く、湿気の多い関西には適した建築様式とも言える。

(※3) 破風とは、元は切妻造、入母屋造の屋根の妻側部分を広く示す名称。

- ④寄棟造は古い形式で全国各地に分布している。入母屋造は新しい形式であり畿内の人に好かれた。

##### B. 寄棟造が「東」に広まった理由

- ①世界各地で見られる一般的な建築様式であり、日本では切妻造に次いで多い建築様式。
- ②機能的な違いとして、破風を持たない寄棟は通気性が少ないため、寒暖の差が大きい地域は適さない。
- ③分布域は概ね能登半島を取り囲んだ形で蛇行しながら岐阜県に入り、飛騨地方と美濃地方の境界を南下し、愛知県三河地方から伊勢湾を経て伊勢・志摩に至るラインより東側が多い。



出所：伊藤良吉「エビス神信仰の多様性—地域と民俗—」

ベンガラ塗は京都（京町屋）、滋賀県湖北地方、岡山県高梁市吹屋地区などに残る。かつては滋賀県下や美濃赤坂「金生山」でも高純度の酸化鉄が生産されており、産地に近い湖北地方でその風習が伝わっていたという根拠の一つになり得る。成分は酸化（第二）鉄であることから機能的に防腐・防蝕に優れている。しかしながら現代では、建築費用が割高になることから白木の新築家屋に塗る風習もやや廃れつつある。また、ヒアリング等では、多賀大社が白木であることから庶民の家は白木を遠慮して塗ったという説もあった。

#### 関ヶ原付近が境界線と考えられる ×

(5) 地藏盆について

A. 地藏盆が「西」(畿内)で広まっている理由

- ①「難波鑑」(延宝8(1680)年)には、「けふは地藏の御えん日にて町々の辻に、わらべども供物、燈明をかかげてまつる也」とあり、そのころから畿内(京都)発祥と見られている。
- ②子どもの成長や幸福を願う民間信仰から広まった。
- ③街道などを通じて畿内全般に広まり、一部は美濃地方にも風習として定着している。分布地域としては美濃地方の西部が中心で、美濃地方の東部、飛騨地方などは存在すら知らない。

B. 地藏盆が「東」に広まっていない理由

- ①地藏盆の対象は「辻地藏」であるが、関東以東では辻地藏の代わりに「道祖神」がその役割を担っていた。
- ②風習が到達していない。

出所：林 英一「地藏盆」初芝文庫

### 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

(6) ひな人形(関東雛、京雛の違い)

A. 男雛(お内裏様)が向かって右に座っている「京雛」が西では広まっている理由。

- ①日本古来は「左上座」であるので、それに倣っている。
- ②伝統を重んじ変えない。

B. 男雛(お内裏様)が向かって左に座っている「関東雛」が全国で広まっている理由。

- ①大正天皇が即位の礼の際、国際儀礼の「右上位」に立たれて以降、日本でも「右上位」の考え方が入った。
- ②関東を中心に即位時のスタイルがひな人形にも定着した。
- ③現代の中心は東京であることから、(関東雛が)全国的に定着した。

出所：「雛人形.jp」ホームページ

### 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

(7) 線香花火について

A. 「スボ手牡丹」が「西」に広まっている理由

- ①300年変わらない線香花火の原型であり、ワラスボの先に火薬を付け、それを香炉に立てて火をつけて遊んでいたことが始まりだと言われている。
- ②米作りが盛んな関西地方ではワラが豊富にあったため、親しみがあつたことから関西地方を中心に広まっていった。

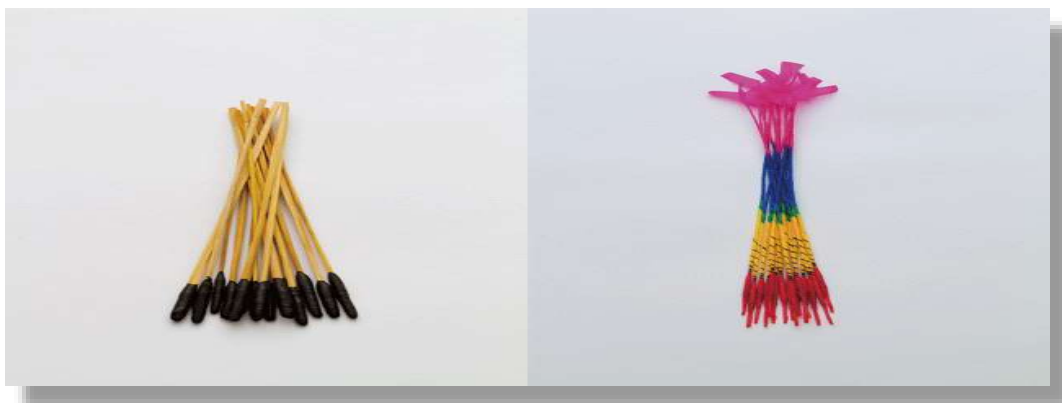
B. 「長手牡丹」が「東」に広まっている理由

- ①関西から伝わる際、関東地方では米作りがあまり盛んでなかったため、ワラの代用品と

して紙で火薬を包んで作られた。

- ②江戸、東京と続いて文化の中心だったことから、スタンダードな線香花火として、全国に広まっていった。

#### <線香花火>



スポ手牡丹（西）

長手牡丹（東）

出所：「筒井時正玩具花火製造所」ホームページ

### 関ヶ原付近が境界線と考えられる ○

#### (8) 火葬後の収骨方法の違いについて

明治8年6月24日に内務卿大久保利通は各府県に火葬場の取り扱いについて通達を出した。その中で火葬された遺骨を同じ場所に埋めることを禁止した。

##### A. 一部収骨が「西」に多い理由

- ①大阪では、明治政府が出した通達を守らず、火葬場と墓地が隣接することもあった。
- ②大阪では墓地が隣接していたので部分収骨とし、残りの骨は隣接墓地に埋めることができた。
- ③西日本ではそのスタイルが広まった。

##### B. 全部収骨が「東」に多い理由

- ①東京は通達を守り、火葬場と墓地が明確に分離していることから、すべてを引き取る（全部収骨）こととなった。
- ②東日本では通達を守った東京の慣習が広まった。
- ③境界域は富山県西部、岐阜県、愛知県より東側が概ね全部収骨となる。

出所：高橋 繁行「葬祭の日本史」講談社現代新書、伊藤良吉「エビス神信仰の多様性—地域と民俗—」

### 関ヶ原付近が境界線と考えられる ×



<文化：東西比較一覧表>

	事象	東西の違い		関ヶ原付近 が境界線	理由
		東	西		
1	大学○年生の呼び方の違い	○年生	○回生	○	京大が東大に対抗。単位を取りさえすれば良く年次は拘らず
2	農耕牛・耕馬	農耕馬	農耕牛	○	産地の影響で西は牛が広まった
3	竈・囲炉裏文化	囲炉裏	竈	○	常に火をたく囲炉裏は東の寒い地域に適していた
4	建築様式の違い	寄棟造	入母屋造	×	寺社建築が身近にあり、格式を重んじた
5	地蔵盆	広まっていない	広がっている	○	京都文化の勢力範囲まで、東は道祖神文化
6	ひな人形	向って左がお内裏様	向って右がお内裏様	○	格式（左が上）を守る西と西洋式に変えた東
7	線香花火の種類の違い	長手牡丹	スボ手牡丹	○	藁スボが手に入りやすい西と紙の東
8	収骨方法	全部収骨	一部収骨	×	政府の通達を厳格に守るか守らないか

## 1.5 その他（中山道3宿の特徴）

- ・ 関ヶ原町は江戸時代の五街道の一つ「中山道」が通過している。西から「今須宿」「関ヶ原宿」があり隣接の垂井町には「垂井宿」がある。この3宿の特徴を見た。



### <今須宿>

- ・ 今須宿は雪の影響もあって「問屋場」が7か所置かれた物流の拠点となっていた。皇女和宮、朝鮮通信使などに見られるような大行列が、京（西）から東へ向かう行程の中では、ちょうどこの今須宿が「お昼休憩」の宿場町として選ばれることが多くあったと言われている。そのため、今須宿は大行列も受け入れ可能な規模の大きな宿場町として栄えた。近代になって今須杉の切り出しが盛んな時期は鉄道駅を設置する話も出たが実現には至らなかった。近江との国境は小さな溝だけなのに対し、東側は今須峠がそびえていたため、同じ美濃国内の交流よりも近江との交流の方が盛んであったと見られる。



歌川広重「木曾街道六拾九次」今須宿

- ・ 寝物語由来
- ・ 「仙女香」とは江戸の坂本氏発売の「おしろい」でタイアップ広告と言われている。

### <関ヶ原宿>

- ・ 関ヶ原宿は北国脇往還、伊勢街道が分岐しているなど、東西のみならず南北の交流も盛んで、美濃十七宿の中でも最も栄えた宿場と言われている。栄えたゆえに武士と遊女との色恋沙汰もたびたび語られた。付近の野上には能「班女」の舞台にもなっている。



歌川広重「木曾街道六拾九次」関ヶ原宿

- ・ 「名物 さとうもち」
- ・ 「そばきり うndon」は当時の茶屋での定番商品だった。

### <垂井宿>

- ・ 垂井宿にも問屋場は 3 か所あった。この宿は美濃国一宮「南宮大社」が近いことから、毎月 5 と 9 の日に大鳥居付近で「六斎市」が開かれていた。門前町として機能の一面も持っていた。宿場町の東端には大垣などを經由して美濃路（脇往還）との追分があり、交通の要衝としての宿場町でもあった。



歌川広重「木曾街道六拾九次」垂井宿

- ・ 左は「御ちや漬」
- ・ 右は「御休〇」
- ・ 左右の茶屋とも、美人画や風景画の錦絵が展示（販売）されているのが分かる。

## 1.6 関ヶ原町を境とした東西文化の調査のまとめ（図表化）

- ・ 全般的に滋賀県（江州）の影響を大きく受けている本町では様々な面で混在・融合が見られる。

<食のマトリックス>

食	餅				味噌			出汁			小鮎の甘露煮			
	文献等	ヒアング	アング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング	
米原市				丸角										
関ヶ原町	今須			丸角										
	今須以外			角										
垂井町				角										
大垣市				角										

食	えび豆				もろこの甘露煮			鮎味噌			喫茶店（モーニング）			
	文献等	ヒアング	アング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング	
米原市				有										
関ヶ原町	今須			有										
	今須以外			有										
垂井町				無										
大垣市				無										

<ことば・方言のマトリックス>

ことば・方言	(マクドナルドの略語) マック・マクド				(雨だ) アメダ・アメヤ			たわけ・あほ			模造紙・B紙		
	文献等	ヒアング	アング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング
米原市													
関ヶ原町	今須												
	今須以外												
垂井町													
大垣市													

ことば・方言	(雨が降っている) フットル・フッタ (-) ル				(行きなざる) イカッセル・イカハル			(鉛筆が) チョンチョン・ピンピン			机をつる・かく		
	文献等	ヒアング	アング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング	文献等	ヒアング	アング
米原市													
関ヶ原町	今須												
	今須以外												
垂井町													
大垣市													

**<参考資料>**

**「関ヶ原町史」関ヶ原町編・発行**

**「ふるさと関ヶ原」**

**「関ヶ原町合戦」関ヶ原町／藤井治左衛門著**

**「関ヶ原の歴史」関ヶ原歴史を語る会 会報**

**「妙應寺史」石川カ山編**

**「江濃国境道中案内」はびろネット東西（とざい）東西プロジェクト 他**